

第85回日本皮膚科学会東京支部 学術大会を終えて

(2021年11月13・14日)

※ハイブリッド開催

佐伯 秀久

日本医科大学皮膚科学教室教授

はじめに

2021年11月13・14日に、第85回日本皮膚科学会東京支部学術大会を京王プラザホテルでハイブリッド開催させていただきました。新型コロナウイルス感染症の流行状況が懸念されましたが、幸いなことに全国的にも感染者数が減少してきたため、当初の予定通りハイブリッドで開催することができました。

本学術大会のテーマ

皮膚科学はとても奥行きが深い学問であり、扱う疾患も非常に幅広いのが特徴です。また、最近の皮

膚科学における病態の解明や治療の進歩は目覚ましく、令和の時代に入りさらに加速しています。皆がそれぞれの得意分野を活かして互いに楽しく教え合い、学び合い、一致協力して前進していこうとの願いを込めて、本学術大会のテーマを「令“和”の時代の皮膚科学—総力を結集して」にいたしました(図1)。

招待講演

招待講演1では、University of California DavisのDermatologyの教授であるSam Hwang先生に、“Explaining psoriasis through T cell migration, meals, and microbes”というタイトルでご講演いただきました。Sam先生は私の留学先のボスですが、乾癬の最新の病態から始まり、食事の影響や腸内細菌の役割など含めて、多くの実験データを示しながらとてもわかりやすい講演をしていただきました。招待講演2では、Nottingham UniversityのDermato-Epidemiologyの教授であるHywel Williams先生に、“Atopic dermatitis: an update on prevention and treatment”という演題名でご講演いただきました。Hywel先生はHOME (Hormonising Outcome Measures for Eczema)の創設者としてご高名な先生です。HOMEとはアトピー性皮膚炎の臨床試験において、コア(核)となる評価方法を国際的に統一していくことを目的に開催されている会議です。今回はアトピー性皮膚炎の予防と治療の最新情報をご講演いただきましたが、日常診療において重要なことは何かを再認識させていただいたとても素晴らしいご講演でした。



図1 本大会プログラム・抄録集の表紙

特別講演

特別講演1では、東京大学免疫学教授の高柳広先生に、「骨免疫学からみた関節炎の病態と治療」というタイトルでご講演いただきました。高柳先生は骨免疫学という新しい学問分野を創設したたいへん高名な先生ですが、私と中学・高校・大学が同窓です。中学時代は生物部の合宿で一緒に過ごした懐かしい記憶があります。高柳先生には乾癬性関節炎を中心に皮膚科領域とも関連の深い分野を含めて、最新の情報をご提供いただきました。特別講演2では、東京慈恵会医科大学分子遺伝学研究部教授の玉利真由美先生に、「アレルギー疾患のゲノム解析」という演題名でご講演いただきました。玉利先生は私の慈恵医大時代を含めて長らく共同研究などでたいへんお世話になった先生です。アトピー性皮膚炎を中心に機能解析を含めてゲノム医学の最新情報をご講演いただきました。

教育講演・シンポジウムなど

21個の教育講演、8個のシンポジウム、6つのハンズオンセミナーなども開催いたしました。中でもハンズオンセミナーは対面実施ができて本当によかったと思っております。また専門医共通講習1(医療安全)の山本知孝先生、教育講演17(COVID-19)の位高啓史先生は私の大学の同級生です。ビデオ出演でしたが、とても懐かしく拝見いたしました。

おわりに

ハイブリッド開催となり、マスク越しではありますがface to faceの学会にできてよかったと思います。総参加者数は2,255名で、ご来場いただいた方は1,060名でした。多くの皆様にご参加いただいたことに心より感謝申し上げます(図2)。



図2 スタッフ集合写真